

4 私設図書館の取り組み

～本を活用したコミュニティの場「まちライブラリー」～



磯井 純充
ISOI Yoshimitsu

まちライブラリー提唱者/一般財団法人森記念財団普及啓発部長
大阪府立大学観光産業戦略研究所所長補佐・客員研究員

私設図書館「まちライブラリー」は本で人とつながることを目的としてスタートした。行政や企業主体による受け身の利用ではなく、利用者が自発的・主体的に参加して人と交流することで「人の発酵」が生まれ、地域社会に豊かな社会関係資本が醸成される。その取り組みを紹介する。

マイクロ・ライブラリー

小さな私設図書館（マイクロ・ライブラリー）が全国に広がりつつある。私自身が2011年に提唱し、自らも取り組んでいる「まちライブラリー」も2017年1月現在、全国で約420カ所に広がった。まちライブラリーは本で人とつながることを目的に、まちのカフェ、自宅、オフィス、お寺や病院、商店街など生活する場に本を置き、閲覧や貸出をしながら人と人との出会いを作ろうというものである。本を持ち寄る際にメッセージを付け、その本を読んだ人がメッセージを返す専用の感想カードを利用しているところもある。本が置かれている場所で、小さな学びあいの会を実施しているところもあり、その場所、規模、運営者は多種多様であるが、出会いと気づきが生まれる地域コミュニティの場となりつつある。

また2013年から私が呼びかけ、実施している私設図書館の活動発表会「マイクロ・ライブラリーサミット」により、全国に点在する「マイクロ・ライブラリー」の様子も徐々に浮かびあがってきており、その数は1,500カ所程度と推計される。日本では図書館といえば公共図書館を想定するが、図書館法にも私設図書館の定義はされており、誰でも同様の活動ができ、そ

れを支援することも呼び掛けているが、その活動実態はあまり明らかになってこなかった。今回、まちライブラリーを中心に民間図書館活動を紹介するとともに、なぜこのような活動をしているのか、その問題意識、増加している背景やこれからの地域にとってどのような意味があるのか、について記述したい。

まちライブラリー誕生の背景

私は今から30年近く前、森ビルの創業者、森泰吉郎氏が始めた「アーク都市塾」という生涯教育活動に携



写真1 最初のまちライブラリー



写真2 お寺のまちライブラリー



写真3 歯科医院のまちライブラリー

わることになった。そこは日本の教育が専門分野に特化し、縦割りになっていたのを広く分野をまたぎ、次代に貢献できる人材の育成が必要であると始めた小さな私塾であった。その後、この活動が慶応義塾大学や早稲田大学などの都心での活動拠点づくりと連動した形で「アーク・アカデミーヒルズ」へと展開し、さらに2003年に六本木ヒルズで「六本木アカデミーヒルズ」へと発展した。誕生直後の小さな私塾は、六本木では巨大な施設の中で国際的なフォーラムや会員制の図書館活動へと拡大していった。

このような発展の一方、施設や組織が巨大化する中で「顔の見える関係」が失われていったように私には感じられた。そんな折に全国の限界集落を歩き廻り、目の前にいる地域の人を大切に作る若者と思いきやかけない出会いをした。彼との出会いで学んだのは結果を追うのではなく、「自らやれることをやり、そこで出会う人を大切に先に進む」というミクロな視点で活動をする大切さであった。そこで私自身が取り組む、小さな個人的な活動としてスタートしたのが「まちライブラリー」である。現代社会の中で、とすれば資本金や組織力がなければ何もできないと考えがちの中で、まちライブラリーはお金や場所、組織がなくても、本を通じて人と出会うというコンセプトを共有できれば、誰でもやりやすい方法でやれることを実証したくて始めたのである。

個の力でスタートできるまちライブラリー

最初のまちライブラリーは、私が生まれた場所に建つ大阪市中央区の小さなビルの一室（20坪）に誕生した。本箱を手作りで作成し、毎月1回実施される「本とバル」というイベント参加者からの寄贈で本は増加していっ

た。参加者は寄贈する本を一冊持ち寄り、自己紹介のかわりに本を紹介しあい、様々なテーマの話やワークショップをやり食事を楽しむ。それによりお互いの価値観や個人的な悩みなど、素直に話せる雰囲気生まれている。5年の歳月を経て、今では5,000冊近い本が寄贈されただけでなく、参加者の間で家族的な雰囲気が生まれている。まちライブラリーは他にも、古い家を改造したカフェ、小さなお寺の境内や本堂、大学病院の透析センターなど、この5年間でいろいろな場所に広がった。

天井まである本棚に囲まれた歯科医院では、落語や読み聞かせのイベントをやっている。神戸の商店街では22のお店が協力して、それぞれ「音楽」「デザイン」「村上春樹」などテーマの違う本を集めている。姫路の小学校では、生徒が廊下にまちライブラリーをつくり、いろいろな学年の子が本を借りられるようにしている。中には本棚もなく、公園にピクニックシートとお弁当と本を持ち寄り、そこで本の紹介をしあい、交換するだけのまちライブラリーもある。亡くなられた奥様の本をもとに、自宅をまちライブラリーにして活動されている方もいる。最近では家やオフィスの外に巣箱のような本箱を置いて、その中に本を置き、自由に貸し借りをするまちライブラリーも誕生している。

蔵書ゼロ冊からの図書館

2013年春、大阪府立大学のサテライトキャンパスの中に「蔵書ゼロ冊からの図書館」を作ろうというユニークなまちライブラリーが誕生した。廊下や教室の壁を本棚にし、市民が本を持ち寄ることにより育てるライブラリーとしたのだ。開館前に「植本祭」というテーマの異なる48にのぼるワークショップを実施し、それぞれの集



写真4 大阪府立大学まちライブラリー

まりごとにテーマ別の本を集めた。各グループの数名程度の参加者が施設全体に広がって同時に本を持ち寄り、話を進めた。結果、二日間で延べ約500名が参加することになった。現在でもこの方式で、利用者が自主的にイベントを実施している。2016年9月現在では9,700冊の本が集まり、開館以来600回以上実施して延べ約1万人が参加し、登録会員も約1,400名になる。

商業施設に併設されたまちライブラリー

2015年春、東急不動産が運営する大阪市中央区森ノ宮のショッピングセンター内にまちライブラリーが誕生した。ここは約50店舗が入る地域密着型の商業施設で、その一区画をディベロッパー自らコミュニティ施設として運営している。まちライブラリーの館内には、カフェ、FM局のサテライトスタジオ、子どもコーナーなどもあり、壁一面が本棚になっている。小さなイベントが月20回以上実施されるだけでなく、FMの公開放送やカフェで食事や飲み物を楽しむ人、親子連れの利用なども目立つ場所になっている。開館以来、1年9カ月で28万人の利用があり、寄贈数も1万2千冊を越え、本の貸出も累計2万1千冊に達している。同じ中央区にある公共図書館の年間利用が13万人(2015年)であったことを考えると、地域の多くの人に利用されている施設といえる。

公共図書館との連携

まちライブラリーは多くの公共図書館とも連携している。連携のタイプは二通りあり、公共図書館の市民サポ

ーターが運営して公共図書館内のエントランスや施設の一部に設置している場合と、公共図書館自身が音頭をとって進めている場合である。伊丹市立図書館や墨田区立ひきふね図書館では、市民グループが自主的な集まりを実施し、持ち寄った本を館内に設置して貸出もしている。逆に鶴ヶ島市(埼玉県)、宮若市(福岡県)、鳥取市、岐阜市、雫石町(岩手県)では、図書館が音頭をとって市役所や駅、公民館、さらにはカフェや歯科医院など民間の協力も得てまちライブラリーを設置している。このように公共図書館だけでもできない活動をまちライブラリーという

形で補完し、市民参加型の本によるまちの活動が実施されている。

地域活性とまちライブラリー

2016年12月、北海道千歳市の中心市街地に「まちライブラリー@千歳タウンプラザ」が誕生した。かつてあった民間の商業ビルを全館リニューアルして、その中心施設としてまちライブラリーを設置し、地域の賑わい空間にしようというものである。ビルの運営者であるセントラルリーシングシステム株式会社は、地上3階、地下1階の延床面積1万5千m²の内、2階に子どもランド、地下1階に屋内パークゴルフ場を併設し、1階部分に約800m²のまちライブラリーと約300m²のカフェを中心にイベントや会議もできる場所を設置したのである。開館1カ月で寄贈された本も7,500冊を越え、地域のコミュニティライブラリーとして運営されている。このように民間の力でかつての中心市街地に文化施設を作り、老若男女が集う場に変えていこうという試みは非常に珍しい事例であり、私も運営アドバイスをしながらその趨勢に注目しているところである。

「人の発酵」

まちライブラリーを中心にその誕生の背景から活動概要を紹介してきたが、私が最も大切にしているのは利用者の自発的、主体的な参加である。まちづくりや地域活性化について行政や企業も様々な試みをしてきているが、住民は受け身であり私事として考えないケースが



写真5 商業施設のまちライブラリー

多い。このような流れを逆転させるためにも「本」を活用し、自ら大切だと思える場所をまちの中に増やしていこうという狙いなのである。

このような小さな行動が、他の人に影響を与えさらに仲間を生み出す課程を私は「人の発酵」と呼んでいるが、これが生まれてくるとその地域社会に豊かな社会関係資本が醸成されると確信している。実際、まちライブラリー実施者へのアンケート調査によると60%以上の人が人との交流が増え、40%以上の人が地域や近隣に愛着を持つ

ようになり、本業もよくなってきたと感じているようである。個人の意識改革が、地域社会へ与える影響も少なくないと判断する。

このようにまちライブラリーは単に私設図書館をつくるだけでなく、それを通じて新しい地域の活力を生み出



写真6 千歳市のまちライブラリー

すことを狙った活動となってきたのである。これからは皆様のご支援、ご指導をお願いし、さらなる精進を重ねて一人でも多くの人に役立つまちライブラリーにしていきたいと考えている。